

Aゾーン

現状では湿地植生が存在しない，あるいは存在していても極めて小規模か消失の過程にある区域で，樹木の伐採や外来種を除去するとともに，導水路による湿潤化を行うゾーン。

Bゾーン

湿地群落が残存している区域で小整備（樹木の伐採や牧場造成時に設置された明渠の埋立て等）を行うにとどめ，現状の保全に努めるゾーン。

Cゾーン

最下流部の堰により洪水時には，冠水するゾーン。

Dゾーン

補助導水路以外の整備・管理は行わず，西中国山地自然史研究会等による実験をモニタリングするゾーン。

Eゾーン

導水路による湿潤化や地形改変を伴う整備・管理は行わないゾーン。

ヌマガヤ群落やアブラガヤ群落については保全に努めるゾーン。

対象区域内において湿地植生として重要なハンノキ群落，ヌマガヤ群落，アブラガヤ群落の各群落と5つのゾーンの位置関係は図2-3のようになる。

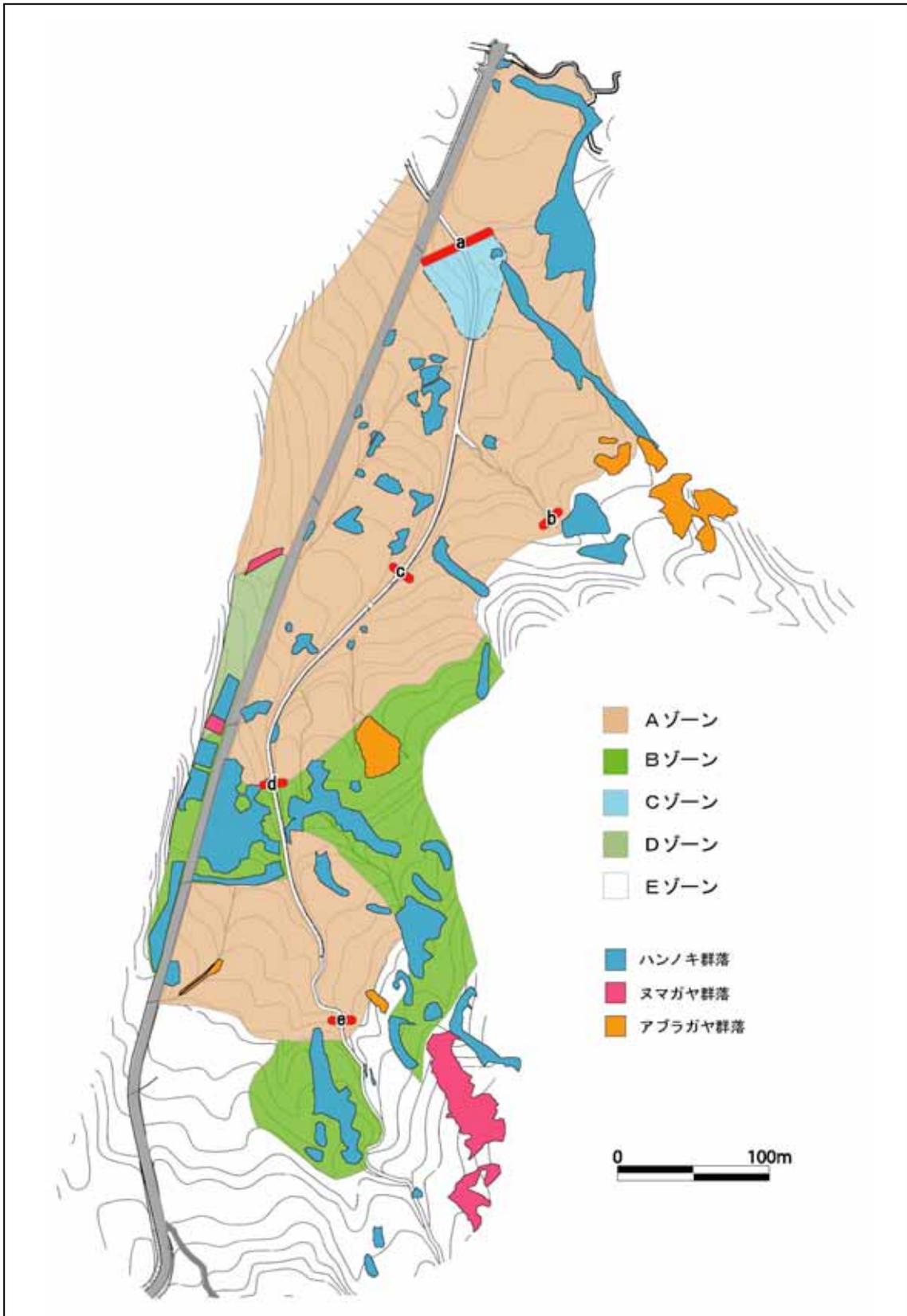


図 2 - 3 ゾーニングと重要な湿地植生

3．自然再生事業の対象となる区域の周辺地域の自然環境との関係並びに自然環境の保全上の意義及び効果

3 - 1．周辺地域の自然環境との関係

(1) 八幡地区の湿原

- 八幡地区には図 3 - 1 のように湿原が多数分布している。これらの湿原は、ヌマガヤ - マアザミ群集に代表される中間湿原で、学術的にも価値の高い湿原である。
- 八幡地区の湿原の中で、対象区域の特徴は次のように整理できる。

八幡盆地^{注1}の最深部・最東端、太田川の源流である柴木川の最上流に位置する八幡盆地の他の湿原に比べ、背後の流域（集水域）が広い八幡盆地の湿原の中では発達段階^{注2}が低い

注1 鈴木 1986 からの引用であり、原著に準じ「八幡盆地」と表記する。

注2 鈴木 1986 によれば、八幡地区の湿原の発達段階について、長者原、尾崎谷、木束原、面谷、楡谷、水口谷の順に格付けを行っている。

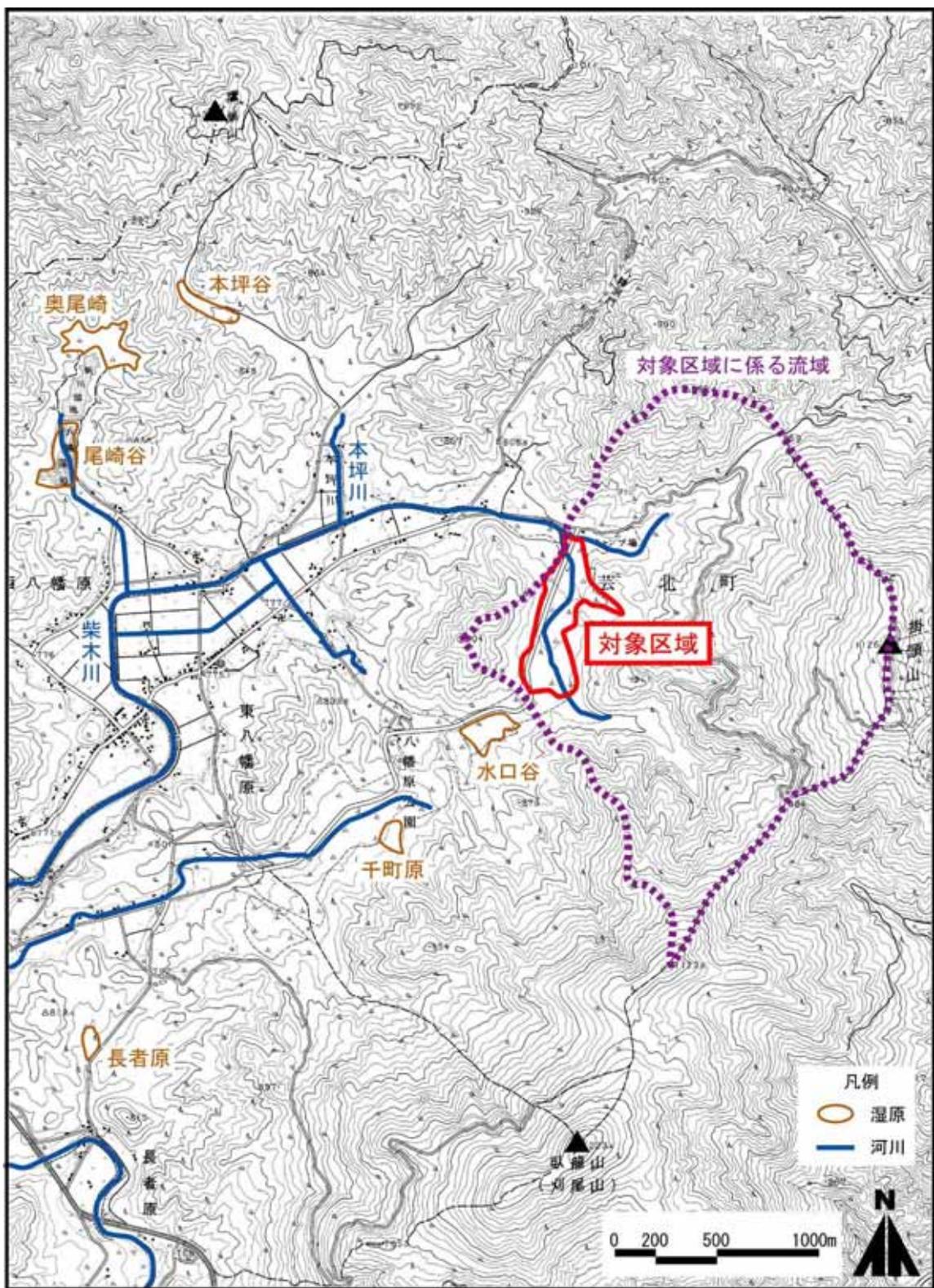
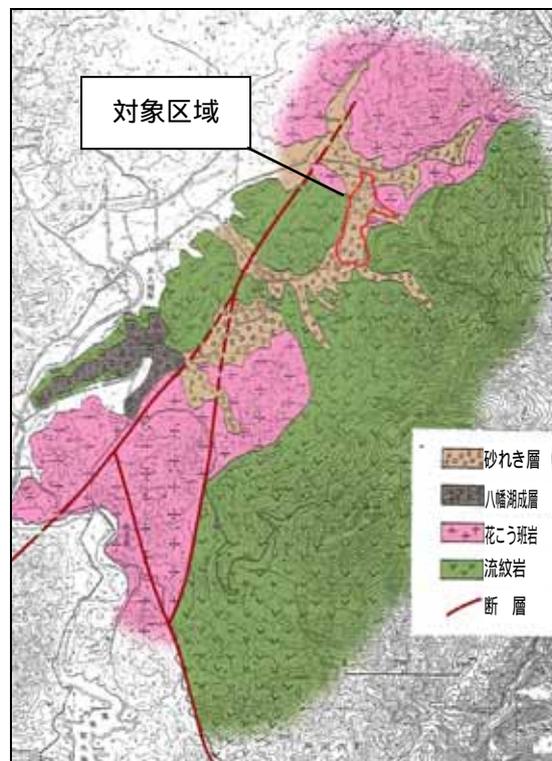


図 3 - 1 八幡地区の湿原分布

(2) 地質

- 八幡地区は、湖成層の分布により、ウルム氷期末期に湖水化していたと考えられている（今村 1969）。この八幡湖成層は、連続する厚いシルト・粘土層が砂礫層に挟在されているもので、このシルト・粘土層が存在する部分に現在湿原が形成されている。
- 一方、対象区域周辺は、臥竜山や掛頭山の流紋岩礫が土石流として流下、堆積した砂礫扇状地で、礫層の厚さは数mと考えられている（楠見 1986）。この砂礫層は、八幡湖成層の砂礫層と異なり、50cm以上もある大礫が混じり、シルト・粘土層が見られないことが特徴である。（図3-2参照）



広島県・臥竜山麓公園(仮称)地域の環境調査報告書・昭和61年3月に加筆

図3-2 対象区域周辺の地質

- このような成因をもつ対象区域周辺は、透水性が高く大きな湿原は発達しにくいですが、波状台地の基盤の浅い谷底に部分的に不透水層としてシルト・粘土層が存在し、地下水水面が露出している場所には滞水ができ、湿原が形成される。
- このように、八幡地区の湿原は、八幡湖成層の上に形成されるものと砂礫層の上に形成されるものとの2つのタイプがある。対象区域の湿原は後者のタイプで、湿原形成が可能な場所を見定めながら、小規模な湿原が連続する特徴を活かした整備を行っていく必要がある。